

Title	『改造』懸賞創作の行方： さまよえる懸賞作家と翻弄されるテキスト
Sub Title	
Author	和泉, 司(Izumi, Tsukasa)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2008
Jtitle	三田國文 No.47 (2008. 6) ,p.37- 52
JaLC DOI	10.14991/002.20080600-0037
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20080600-0037

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『改造』懸賞創作の行方

—さまよえる〈懸賞作家〉と翻弄されるテキスト—

和泉 司

1 『改造』懸賞創作登場の背景

総合誌『改造』が創刊十周年を記念して懸賞創作募集を発表したのは、一九二七年八月号においてである。そこには、次の一頁大の告知が掲載されていた。

雑誌「改造」十周年記念

懸賞創作募集

来る昭和三年四月一日は改造社の創立十周年に当ります。雑誌「改造」は十周年記念号を発行し創作論文に於て我國の代表作を網羅する以外左記の懸賞方法により小説、戯曲を募集します。

1 懸賞金は一等一名一千五百円、二等一名七百五十円とす。

2 応募小説戯曲は四百字詰百五十枚以内とし本年十二月一日を以つてメ切る。

3 当選原稿の一等は昭和三年四月号の『改造』に、二等は

同五月号の『改造』に登載す。

4 応募小説戯曲は社中選のこと。

5 宛名は「懸賞創作」と封表に記載し『改造』編集部宛てのこと。

6 誌上の匿名は許さず。賞金は発表と共に交付す。

7 応募原稿は一切還付せず。且つ応募者は略歴一葉添付ありたし。

改造社

「円本」の成功によつて莫大な収益をあげ、また『中央公論』とともに一流総合誌として認められていた『改造』はこの時期、作家あるいは文学テキストの確保には困っていなかったにもかかわらず、一五〇〇円という破格の賞金と、百五十枚というまとまった分量の小説そして戯曲までも視界に入れた懸賞創作募集を打ち出した。

ここでの懸賞創作募集の主たる目的は、新たな読者層・購買層の掘り起こしにあったと思われる。杉山欣也が指摘するよう

に、この昭和初期は、「円本」ブームの一方で、『改造』は『キング』に象徴される雑誌・文学の大衆化の波にさらされてもいたからだ。⁽¹⁾そのため、『改造』は二七年一月号から定価を八十銭から『キング』と同じ五十銭に値下げし、同時に「本誌値下げと十倍拡張運動」を訴える告知を出している。また、『改造』本誌の活字ポイントを下げ、二段組にして頁あたりの情報量を増やし、さらに読者層の拡大のため中間読物と文芸欄にルビを振った。これらは「円本」を成功に導いた際の戦略と同じであり、それを『改造』本誌に還元したのである。⁽²⁾

このように、この時期『改造』は「円本」の爆発的な普及によって掘り起こされた新しい読者層・購買層を『改造』本誌の購読層にスライドさせることを目指していた。そしてその際、懸賞創作募集という企画は有効な手段であった。「円本」普及によって「文学を読むこと」へ接近した「大衆」と呼ばれる新たな読者層・購買層に、「文学を書くこと」への欲望を喚起することで、『改造』本誌への購読意欲を加速させたのである。それは、中等教育の普及と学校文化・教養主義の「大衆」化によって、「文学を読むこと」そして「文学を書くこと」の底辺が拡大していたことの証左でもあるだろう。そして、『改造』は即座にその点に着眼したのである。

2 〈懸賞作家〉の登場

『改造』懸賞創作は、しばしば「最初の懸賞小説募集」と評される。しかし、紅野謙介が指摘しているとおり、日本文学史はすでに明治後期には「懸賞小説の時代」を経験していた。⁽³⁾

ここで『改造』の懸賞創作募集が「最初の」と形容されるのは、戦後に深田久弥が「わが記者時代を語る」「改造」の三十年本社出身作家の座談会（『改造』一九五〇年三月号）の中で、「大雑誌が創作の懸賞創作を募集したのは『改造』が最初です。」（略）あれから創作の懸賞募集は方々で盛んになりましたが、『改造』のあれが最初でしたな。」と述べたことの影響であると思われる。

しかし、それでも『改造』懸賞創作募集が「最初の懸賞募集」という誤解をそのまま引き受けてきたのは、この企画がそれまでの懸賞募集と比較して規模が大きく、そして安定して継続されたことに関係しているであろう。

『改造』懸賞創作は、二八年四月に第一回の結果が発表されてから、三六年、三八年の二度の中断を経ながら三九年の第十回まで続いた。⁽⁴⁾『改造』が懸賞創作募集を始めた後に、三四年からは「中央公論」も「中央公論原稿募集」を開始し、改造社の文芸誌「文芸」も「文芸」懸賞創作を募集した。⁽⁵⁾その点で、賞金規模や当選者への執筆メディアの提供などを考えても、『改造』懸賞創作を、懸賞小説募集の原型とみるという判断が生まれたのではないかと思われる。

しかし、最初の募集告知からも明らかなように、当初この企画は『改造』の十周年記念企画であって、継続されるかどうかはつきりしていなかった。賞金額の大きさからいっても、文字通り「記念」企画と映ったであろうし、故にそれほど注目を集めなかった。事実、この懸賞創作募集が告知された後も、他誌の文芸時評欄などでは反応はみられなかった。⁽⁶⁾

つまり、『改造』懸賞創作が注目を集めるようになるのは、その継続性が認知されるようになってからだと言える。年一回の募集と高額賞金、そして当選者が当時文芸誌としてもトップクラスの地位にあった『改造』を中心にテクスト発表の場を与えられたことが、「文学を書くこと」への欲望に周期性までも喚起させ、関心を引き留め続けたのである。

そして、この局面において、『懸賞小説の時代』には存在しなかった作家が登場することになる。それが、『懸賞作家』であった。

明治後期からの「懸賞小説の時代」における懸賞は、基本的に作家志望の青少年たちの習作発表の場としての機能が主であった。この当時、作家としてデビューするためには、例えば『改造』の編集者であった水島治男が言うように「先輩・師匠に当る作家から、出版社（編集者）に紹介してもらうか、大胆に自分で持ちこむか、同人雑誌に書いていて年季を入れているうちに、営業雑誌へスカウトされるか」⁽⁸⁾しかなかった。水島は、同時に「あるいは懸賞小説に応募して当選する道とがある」とも述べているが、それは水島がまさに『改造』の文芸担当編集者であったからであり、懸賞による「文壇」登場は、決して一般的な方途ではなかった。故に共通体験としての同人誌活動や、作家の下での書生経験などの下積みを経ずに、いきなり『改造』を出発点として登場する「懸賞作家」に対し、既存の文壇人からは強い違和感が向けられていくことになる。

例えば『改造』懸賞創作の第三回一等当選者である芹沢光治良は、林芙美子から戦前に次のような忠告を受けたと語ってい

る。

（林芙美子は「引用者」私が『改造』の懸賞によって文学の世界にはいったことは、文壇人から或る種の軽視を受けているので、生涯の損失であるから、それだけに文壇人と親しむように努力するべきだと、熱心に幾度も忠告した。それには、家にこもっていないで、街に出て、文士の会合に出席するのは言うまでもなく、文士の集る酒場にも行って、気軽につきあうようにと言うのだった。

ここで芹沢が言う『改造』でデビューした作家は「文壇」で軽視される」という主旨の指摘は、他の作家の回想からも見ることが出来る。例えば、高見順は『昭和文学盛衰史』において、芹沢光治良を評価する文脈で次のように言う。

総じて懸賞当選作家というものが育たないのは、どういうわけなのだろうか。懸賞で当てようというような精神のなかには、「まともに」文学の育たないものが含まれているのだろうか。（中略）懸賞に応募するというのはしかし、この、当ててやろうといった動機からだけでなく、自分の作品を発表できる場所も機会もないひとが応募という方法を選ぶ場合もあるだろう。芹沢光治良はそれだったと思われる。

だが外見的には、ひとしく懸賞作家だと一種の眼で見られねばならなかった上に、文壇常識の作家コースを踏んで

ないといふところから、いわば継子視された彼だったのである。⁽¹⁰⁾

高見は、芹沢が『改造』懸賞創作当選者の中で唯一の「成功した作家」であるとしており、それは他の回想者、『改造』と『文芸』の編集者であった上林晩にも共通してみられる。しかし、そのような芹沢でさえ、戦前から戦後までも、『改造』懸賞創作でデビューしたことで「軽視」されているというのである。

このように既存の〈文壇〉からの〈懸賞作家〉への蔑視は強烈であったが、しかし、そのような蔑視を無視できる程、『改造』懸賞創作が提供した〈懸賞作家〉へのルートは魅力的であった。それは、短期で終わったとはいえ『中央公論』までも追隨して懸賞を企画したことにも現れている。『改造』懸賞創作は、〈文壇〉の外側——そしてそれは遙かに大きな読者層・購買層となりうる人々に、「文学を書くこと」への欲望を喚起することにまずは成功したのである。

3 『改造』懸賞創作とその始まり

では、具体的に、『改造』懸賞創作にはどのような作家・どのようなテキストが当選し、彼らとそのテキストにはどのような行方をたどったのであろうか、まずはここで、『改造』懸賞創作の当選者と当選作を確認してみたい。

二等 保高德蔵「泥濘」

第二回（二九年） 二等 高橋丈雄「死なす」

中村正常「マカロニ」
明石鉄也「故郷」

第三回（三〇年） 一等 芹沢光治良「ブルジョア」

二等 大江賢次「シベリヤ」

第四回（三一年） 二等 田郷虎雄「印度」

騎西一夫「天理教本部」
太田千鶴夫「墜落の歌」

第五回（三二年） 二等 張赫宙「餓鬼道」

阪中正夫「馬」

第六回（三三年） 二等 荒木巍「その一つのもの」

角田明「女碑名」

第七回（三四年） 二等 酒井龍輔「油麻藤の花」

大谷藤子「半生」

第八回（三五年） 二等 湯浅克衛「焰の記録」

佳作 三波利夫「ニコライエフスク」

第一回（二八年） 一等 竜胆寺雄「放浪時代」

三六年募集無し。

第九回（三七年）

佳作推薦

龍瑛宗「パイヤのある街」

三八年募集無し。

渡辺渉「霧朝」

第十回（三九年）

二等

小倉龍男「新兵群像」

竹本賢三「蝦夷松を焚く」

井上薫「大きい大将と小さい大将」⁽¹³⁾

以上、四三年に「戦時新人小説募集」が行われるものの、『改造』懸賞創作としての募集は第十回が最後となる。三六年、三八年の「募集なし」も含め、募集中止についての説明は行われていない。『改造』の場当たり的な編集方針が現れていると言えよう。

ここに掲げたとおり、第一回の当選作は一等が竜胆寺雄「放浪時代」、二等が保高德蔵「泥濘」であった。二八年四月号に一等の「放浪時代」が、翌五月号に「泥濘」が、それぞれ作者の写真と共に掲載され、また四月号の「懸賞創作発表」の際には、「佳作」十編を題名のみ掲載し「此のうちから二三篇は選外人賞として三百円を贈り本誌に登載することとなるだろう」と記されており、一等、二等に外れても『改造』登場の可能性があることを示し、投稿意欲を促進させていた。⁽¹⁴⁾

ここで、特に一等の竜胆寺雄「放浪時代」が、その「モダンズム」性と、「新人」性によって高く評価されたことが、『改

造』懸賞創作の興行的な成功の第一を担った。竜胆寺はここから、「モダンズム」文学の寵児、新興芸術派の代表作家となり活躍していくのである。このような竜胆寺の行き方が、『改造』懸賞創作によるデビューを「確かなもの」であるとその応募者に印象づけていくことになった。

そして、第三回一等当選の芹沢光治良「ブルジョア」をもつて、『改造』懸賞創作の「文壇」における評価は固まった。「ブルジョア」によって、芹沢はたちまち「文壇」での地位を確たるものとしていくが、同時に、作者・芹沢光治良が「文壇」的には全く無名であること、「東大経済学部を出て、直に農商務省に入り、高等官、従七位。三年半で、一本気な一生を厭つて巴里に渡り、四年半遊学。最近帰朝」という、確固たる教養的背景を持った、いかにも『改造』読者の趣味嗜好を刺激する「新人」であったことが、『改造』懸賞創作の権威を高める一因となったのである。

もちろん、その一方で、逆に経歴が怪しい「新人」も現れていた。芹沢と同じ第三回に「シベリヤ」で二等に当選した大江賢次の略歴は「尋常小学を終ると野良ヘッン出され蚯蚓のやうな惨めな貧困十年」⁽¹⁵⁾「搾られ尽して、吹雪の底で自殺を計る、果し得ず郷里を飛び出す。人道主義の書生、雑誌記者、工場労働。」⁽¹⁶⁾「朝鮮、満州、シベリヤへ放浪し最近帰つてきた。」とあり、並んで記されている芹沢のそれと非常に対照的であった。そして、この大江の経歴は、学歴や教養的背景のない者でも当選できる、という意味で、やはり刺激的であった。

この芹沢と大江の「略歴」は、それぞれ自ら書いたものであ

る。『改造』懸賞創作では、自筆の略歴添付が投稿規定に盛り込まれているからだ。つまり、投稿者たちは、この「略歴」によっても自身の価値をアピールすることになる。芹沢と大江の略歴には、それが顕著に表れているし、逆に言えば、そのような戦略を投稿者側に選ばせる『改造』側の選考方針が効果を上げていたのである。

それは、朝鮮人である第五回の張赫宙や台湾人である第九回の龍瑛宗の当選からもわかる。両者のテクストは、ともに日本語の運用能力、物語展開や内容の面では日本人、つまり日本語ネイティブによるテクストと比べ見劣りが否めないものである⁽¹⁷⁾。にもかかわらず彼らのテクストが当選したのは、「植民地出身者の当選」のニュース性を『改造』側が考慮したことはほぼ疑いないからだ。

これには、『改造』が海外や外地への販路拡大を意識していたことが傍証となるであろう。張赫宙当選の翌年の「第六回懸賞創作入選発表」記事には、「前年の張赫宙君の入選に刺激されたものか、朝鮮よりの応募が頗る多かつた。」と述べられているし、さらに台湾でも、「第二の張赫宙」「台湾の張赫宙」の登場を望む、という記事が台湾島内発行の同人誌で散見されるようになっていくのである⁽¹⁸⁾。

以上のような点から、『改造』懸賞創作の当選作家・当選テクストの傾向が見えてくる。

『改造』懸賞創作は、基本的に編集者によって選考が行われていた。深田久弥によれば、第一回は最終選考を正宗白鳥、佐藤春夫、藤森成吉に依頼したが、二回以降は編集部のみで選ん

だという⁽¹⁹⁾。そしてそれは、『改造』懸賞創作の選考が、『改造』本誌の編集方針の影響を直接に受けることも意味していた。つまり、左翼的情報・国際情報・外地情報への傾きである⁽²⁰⁾。この傾向は、回を重ねるにつれて明瞭になってゆき、そしてそれと反比例するように、『改造』懸賞創作は価値を失っていくことになるのである。

4 竜胆寺雄から芹沢光治良まで―初期の傾向

第一回の一等当選者である竜胆寺雄は、先に述べたように、当選後モダニズム文学あるいは新興芸術派の旗手としてめざましい活躍を見せた。竜胆寺は雑誌掲載テクストは当然のこと、三四年までの間に十一冊もの単行本を出している⁽²¹⁾。そして、第二回に当選した中村正常もまた、ナンセンス文学の作家として新興芸術派の有力な一人と見なされるようになっていた。

一方、第一回に二等当選となっていた保高德蔵は、竜胆寺らの華々しい活躍とは無縁であった。保高は懸賞創作に当選するまで全く無名であった竜胆寺と違い、当選以前から、既に宇野浩二、広津和郎、直木三十五らとの関係があった⁽²²⁾。保高は懸賞賞金を元手にして、竜胆寺と共に「文壇」の中で発表機会を得られない若い作家志望者たちのための雑誌を立ち上げている。それが三二年に創刊された『文学クオタリイ』であり、後の『文芸首都』である。

さらに保高は、「改造友の会」という当選者グループも結成した。芹沢によれば、「改造友の会」は「当選者が十人以上になった頃⁽²³⁾」結成されたというので、三二年の第四回の当選発表

以降ということになる。⁽²⁴⁾

このような動きは、保高が既存の「文壇」タイプの作家であることを示している。第一回だからこそ現れた「懸賞作家」であると言えるだろう。保高は作家としての成功は出来なかったが、『文芸首都』主催者として、現代文学史にまで名を残すことになった。

最初期の『改造』懸賞創作には、プロレタリア文学の影響も当然現れていた。第二回の明石鉄也「故郷」は、学連事件に関与して帝大を退学した「私」が鳥取の故郷に帰り、そこでまた労働運動を指揮する物語であり、同時に当選した中村正常の「マカロニ」とはかけ離れたテキストであった。第一回、第二回は、プロレタリア文学に目配りをしつつ、モダニズム文学の旗手を生み出していくというバランスの中で懸賞当選作が選ばれていたことになる。

それが、第三回に芹沢光治良「ブルジョア」の登場で変化した。「これも崩滅する階級の一態である。」という一文で始まる、スイスの「結核都市」を舞台としたテキストは、芹沢個人のエリート性も合わせ、「国際性」を前面に打ち出していた。二等当選の大江賢次「シベリヤ」は、シベリア出兵を題材にしたもので、芹沢と「ブルジョア」の背後にかすんでしまったが、「ブルジョア」と並び片仮名題のテキストで、やはり「海外」を舞台としているという点で、『改造』懸賞創作と「国際性」を結びつける意識が投稿者に伝えられていった。

5 「国際化」から「外地」へ

―懸賞創作の盛況から低落へ―

そしてそれは、第四回以降に顕著に表れていった。

三年の第四回二等当選作の筆頭は、田郷虎雄「印度」であった。田郷は「文壇」ではほぼ無名で、自身はインドと全く関係がなかったが、おそらく第四回応募締め切り前の、三〇年の春から夏にかけて、ガンジの塩の行進事件や、対日規制を意識したインドの綿布関税引き上げ問題など、インド関連のニュースが新聞紙面を賑わせていたことから、「印度」執筆を着想したと思われる。当然そこには、前年の当選作が両方とも「海外」が舞台であったことも念頭にあっただろう。そしてそれは、田郷のみが意識したことではなかった。第四回の選評では、

(略) 著しき傾向としては、取材の範囲が我国内に限らず、諸外国を舞台とする国際小説といふべきものの多かつたことである。従つて、投稿者には遠く英、米、独、仏、その他ブラジルなどに居住してゐる人があり、本社の懸賞創作の影響力が如何に世界至る処にあるかを知つて、大いに意を強うした次第である。

と述べられており、「国際性」を意識した投稿者の増加がはっきり指摘されていた。

田郷は、懸賞当選以後『改造』に「支那」(三二年三月号)

を発表し、続けて『文学時代』（三二年五月号）に戯曲「満州国」を発表するなど、「海外」から、「外地」を意識したテキストを発表し続けた。ここには、田郷の当選後に起きた満州事変の影響が考えられる。田郷は少女小説家としても活躍しつつ、主に満蒙開拓を推奨する内容のテキストを量産し、典型的な翼賛作家となっていくのである。⁽²⁵⁾

そして、第五回では前述の張赫宙が登場する。

当選作「餓鬼道」は、劣悪な労働環境の下に置かれた朝鮮人工夫たちを描いたもので、プロレタリア文学の影響は明らかであったが、そのマンネリ感を、「植民地朝鮮を・朝鮮人が描いた」という新鮮さによって押し流していた。また、「餓鬼道」当選の前年に起きた満州事変後という時期に、「外地」への興味・関心が高まっていたことも、朝鮮人作家の登場を強烈に印象づけることに役立った。

張は、『改造』懸賞創作当選者の中でも、芹沢と並んで『改造』や同社発行の『文藝』に登場する回数が多い「人気作家」となっていく。

登場時は植民地統治を批判的に描いていた張であったが、『中央文壇』での地位が安定するにつれ、『朝鮮文壇』との対立が深まった。そして次第に翼賛作家的な傾向を強めていくことになる。⁽²⁶⁾故に張は現在まで「親日作家」として批判を浴びている。

戦後は朝鮮半島へ帰らず、日本に帰化して野口赫宙となった。『改造』でのデビューは張に有名作家としての地位を与えたが、それによって故国を失うことになったのである。

「海外」を描いた当選作は続く第六回の角田明である。角田は当選作「女碑名」がデビュー作であった。フランスへの留学歴があった角田は、「女碑名」も舞台をフランスにとったものであったが、しかし小説としては注目を集めることが出来なかった。角田は後に新聞記者として再びフランスへ渡り、作家としての活動は途絶えた。しかしその妻・角田房子が戦後になってノンフィクション作家として活躍することとなる。

また、第六回、第七回では、後に『日暦』『人民文庫』のメンバーとなる荒木巍、大谷藤子が当選している。既存の「文壇」ルートにいた二人も、『懸賞』の魅力に引きつけられたのである。

『改造』懸賞創作は、竜胆寺雄と芹沢光治良という二人の作家を「文壇」の中心へ送り込み、それによって懸賞創作の「文壇」における地位を確立させた。しかし、地位が確立した後、目立った当選作家が登場しなくなるといって、皮肉な事態が生じてしまった。そこには、『改造』側の選考が、オーソドックスな純文学か、「国際性」や時事問題、「外地」の物珍しさを描いたものなどに偏り、新鮮なテキストを選ぶことができなかったことも影響していると思われる。

また、三四年には、『改造』懸賞創作の地位確立の一翼を担っていた竜胆寺が、川端康成や菊池寛など、「文壇」に勢力を持つ作家たちを痛烈に非難した「M・子への遺書」（『文芸』三四年九月号）を発表したことをきっかけに「文壇」における自らの立場を失い、ほぼ姿を消すという事態まで起きた。竜胆寺の騒動は、「M・子への遺書」が改造社発行の『文芸』に掲載

されていることを考えれば、その内容を編集者がきちんとチェックすることで防げたはずであった。ここに、『改造』側の当選者への管理やケアが当選後ほとんど行われていなかったことが現れていた。

6 芥川賞の登場と『改造』懸賞創作

三四年の第七回の当選発表では、選外佳作に——事後的にみて——注目すべき名前があった。第一回芥川賞を受賞することになる石川達三「蒼氓」である。⁽²⁷⁾『改造』懸賞創作に落ちた「蒼氓」の芥川賞受賞は、この時期の「懸賞」の位置づけと、『改造』懸賞創作の行方を考える上で重要な問題となる。

『改造』懸賞創作の前に現れた芥川賞は、同人雑誌を含めた新聞雑誌に掲載された「新人作家」のテキストから選考し賞を与える、という、既存の「文壇」登場ルートと「懸賞作家」ルートをかけ合わせたようなものであり、『改造』懸賞創作とは、一見競合しないものであった。

しかし、『改造』懸賞創作が、芥川賞によって、「懸賞作家」登場ルートとしての権威の半ば（あるいはそれ以上）を奪われたことは、後に明らかになっていく。

原卓史によれば、『改造』懸賞創作に当選した作家は、芥川賞候補となる資格を失ったという。⁽²⁸⁾故に、荒木巍や大谷藤子には芥川賞候補となる資格が得られず、選外佳作にとどまった石川には候補となる権利が与えられた。このように、『改造』懸賞創作当選者は芥川賞候補から排除されていた。

もともと、後発の「懸賞」である芥川賞が、『改造』懸賞創

作当選者を候補に選んでも、『改造』側が歓迎したかは疑わしい。当選作家が芥川賞の候補に挙げられると言うことは、『改造』懸賞創作が、芥川賞の下の位置にあることを認めることになるからだ。また、芥川賞は賞金も五〇〇円と『改造』懸賞創作よりも低く、規模と継続性からいえば、たしかに『改造』懸賞創作は芥川賞の上位にある「懸賞」であった。

しかし、『文藝春秋』によって行われたこの「懸賞」は、メディア戦略において『改造』懸賞創作を遙かに上回っていた。賞の制定から受賞に至るまでの状況は各新聞メディアで報告され、各作家たちが候補になれるかどうかという問題も含めて、『文壇』の注目を集めたからである。これに対し、すでに七回を数えていた『改造』懸賞創作は新鮮味も失われ、宣伝メディアも『改造』に限られていた。また「著名作家の原稿には困っていない」という『改造』の状況が、当選者へのケアを怠らせていた。『改造』編集部は、竜胆寺、芹沢、張赫宙などの一部の作家を除いた当選作家たちを積極的に育ようとはしなかったのである。

このように、芥川賞の登場とともに、『改造』懸賞創作はその勢いを失っていく。それは三五年第八回の懸賞創作の入選発表の際に早くも現れていた。

第八回は二等当選が湯浅克衛「焰の記録」のみで、初めて佳作が設けられ、三波利夫「ニコライエフスク」に与えられた。またまとまった選評もなく、巻末の「編集だより」に、次のように記されているだけだった。

第八回懸賞創作入選の結果を発表した。今年は例年に比して応募作品が甚しく少なかったためか、二等一編、佳作一編といふ不作であつた。懸賞創作の募集は今日誌界の流行となり、開拓の手が隅々まで行届いたためとみるべきであらうか。それにしてもこの結果は遺憾である。

第八回の入選発表は三五年四月号であるから、この時点でまだ第一回芥川賞は発表されていない（発表は同年八月十日）。

である以上、この「不作」は、『改造』懸賞創作自身の低調が原因であるだろう。三五年は『中央公論』原稿募集、『文芸』懸賞創作も行われており（結果的に両誌ともこれが最後の募集であつたが）、その意味では確かに投稿者の選択肢も広がっていた。賞金額の高い『改造』懸賞創作を、競争率が高いと見て避ける傾向も、確かにあつたのかもしれない。

しかし、一番の原因は『改造』懸賞創作に対する魅力が失われてきたことだつたのではないだろうか。代わり映えのしない選考基準、目新しさのない当選作、厚遇されない当選作家たち……。それらの姿が、投稿者の『改造』懸賞創作への投稿意欲を失わせたのではないだろうか。

第八回の二等当選作湯浅克衛「焰の記録」は、朝鮮半島へ母と二人で渡り、苦難の生活を経験した女性の回想の形をとっている。ここで『改造』は再び植民地朝鮮を舞台としたテキストを選んだことになるが、実は湯浅も石川達三同様、第七回において選外佳作となっており、そのテキストが、湯浅の戦前期のテキストにおいて最も言及されることの多い「カンナニ」であ

つた。

この「カンナニ」が選外佳作となつた経緯からも、『改造』懸賞創作の低調化が現れてくる。第七回の入選発表の選評において、「カンナニ」は選外佳作ながら異例の言及を受けていた。それは、「尚佳作のうち数編はすて難きものがあつたが、特に「カンナニ」の如きは発表の困難さの為に採り得なかつた。投稿家諸君は、発表の可能性についても十分に注意されたい（傍線は引用者）」というものだつた。

『改造』懸賞創作はここまで、明石の「故郷」、大江の「シベリヤ」、張の「餓鬼道」、荒木の「その一つのもの」などで、雑誌掲載時に多くの伏字や削除を行つてきた。逆に言えば、それでも掲載してきたのだつた。それが、第八回に至つて、「発表の困難さ」を述べ、投稿者に「発表の可能性」を「注意」することを訴えるのは、『改造』本誌の在り方から見ても後退したように映るし、恐らく同時代においてもそのように受け取られたであろう。

結局この「カンナニ」は、三五年四月号の『文学評論』に掲載され、その際も後半部は全て削除された。つまり『改造』編集部が発表が困難であるとした判断は誤つていたわけではない。発売禁止処分や削除処分を受ければ多大な損失を被る以上、それを避けようというのは当然のことであるからだ。

しかし、ここで問題なのは、その労を投稿者―読者の側に求めてしまったことにある。ある意味伏字や削除の多さを、反体制的総合誌の「売り」にしてきていた『改造』が、投稿者に向かつてそれを避けるように訴えるのは、『改造』の価値を自

ら切り崩していることと等しかったはずだ。しかし、この選評はそれに気づいていないのである。

そして実際、「カンナニ」と「焰の記録」を比較するとき、その訴求力の低下は明らかであった。

「焰の記録」は朝鮮半島を舞台としていても、登場人物は基本的に日本人で、朝鮮人はテクストの前景にほとんど登場しない。子供社会における日本人と朝鮮人との接触と衝突と差別とを描いた「カンナニ」とは大きな差がある。

また、「焰の記録」における伏字は少なくはないがそれぞれが短く、内容を把握するには問題がない程度であった。つまりその程度に抑えるよう描かれているのである。

「焰の記録」では、同時に女性の自立の問題も描かれており、単独のテクストとしても十分評価に耐えうるものではあるが、「カンナニ」が落とされた上で投稿したテクスト、という文脈を考えると、その「おとなしさ」に気づかざるを得ない。⁽³⁰⁾そしてその「おとなしさ」が、ピークを過ぎてしまった『改造』懸賞創作の現状を象徴していたのだ。

『改造』懸賞創作は、翌三六年に募集されなかった。同時期に『中央公論』『文芸』も懸賞をとりやめ、雑誌懸賞創作の勢いは失われた。その一方、芥川賞の熱気はどんどん高まっていた。芥川賞が〈懸賞〉の中心をなしていくとき、そこに関与しない(できない)単独の懸賞創作は、勢いを失っていったのである。

7 なし崩しの終焉

三年の「募集なし」の後、三七年に向けての第九回の『改造』懸賞創作の募集が行われ、三七年四月号で当選作が発表された。それが前述の台湾人作家・龍瑛宗「パイヤのある街」と、渡辺渉「霧朝」であった。

この両テクストは、一等でも二等でもなく、「佳作推薦」という賞が与えられていた。つまり、最も評価が高いものでも、前回までの水準に達していなかったということになる。一年の中断期間がありながら、さらにレベルが落ちてしまったのだ。

しかも渡辺の「霧朝」は、五月号に掲載予定だったはずが、何の断りもなく七月号まで掲載が延期された。そして、渡辺は「霧朝」以外に、改造社の雑誌にその後一回もテクストが掲載されることがなかった。渡辺以前に、当選後『改造』や『文芸』に一度も登場しなかった当選者は、他には第四回の二等当選者・騎西一夫しかない。しかし騎西、本名松本一三は戦前から日本共産党に参加しており、当選後に地下に潜っていた。渡辺の事情は不明だが、当選作「霧朝」を読む限り、その力量から原稿依頼が来なかったという可能性の方が高いであろう。

一方、龍瑛宗「パイヤのある街」は、張赫宙「餓鬼道」の「二匹目の泥鰌」狙いを強く感じさせる選考といえた。それは、三輪健太郎(『改造』第九回懸賞創作発表とその推薦作品(一)『懸賞界』三七年六月号)の同時代評で端的に指摘されている。三輪は、「パイヤのある街」の選考は「ジャーナリスチックな態度」で選んだのではないかと皮肉っている。「龍

君の『パイヤのある街』は、たとへそれが三輪健太郎で、『桜のある町』であつても、渡辺君の『霧朝』と共に一番優れた作品であつたのであらう。」という指摘が続いているように、台湾人作家の植民地台湾を描いたテクスト、という物珍しさから選ばれたに過ぎないと批判しているのである。

その他の多くの日本内地における同時代評では、「ルポルタージュ的」であるとか、「台湾のことがよくわかった」などの好意的な評価を受けたが、逆に言えば、見知らぬ台湾を描いている、という以外には評価されていなかった。一方、〈台湾文壇〉においては、龍が〈台湾文壇〉には全く関与していなかったことや、台湾の描き方の違いなどから批判が起り、龍はその対応に追われることになった。⁽³²⁾張赫宙と同じように、〈中央文壇〉に登場したことで、出身地の〈文壇〉との摩擦が生じたのである。〈中央文壇〉で安定した地位を築くことが出来た張と異なり、龍は「パイヤのある街」以降日本内地では目立った活躍が出来ず、〈台湾文壇〉に活動の中心を移していくことになるが、その際にも、特に台湾人作家たちとの関係回復に多くの時間を割くことになった。戦後（台湾においては「光復」後）になると、日本語での文学活動が出来なくなり、龍は戦前台湾銀行で働いていた経歴を生かし銀行員に戻る。龍が作家としての地位を回復するには、八〇年代まで待たなければならなかったのである。⁽³³⁾

このように、再開はしたものの、低落傾向が止まらなかった『改造』懸賞創作は、翌三八年またも募集を行わず、三九年に第十回の発表を行った。このとき、日本帝国はすでに日中戦争

下で、第十回の募集要項も、次のような戦意発揚の形にまとめられていた。

聖戦すでに一歳を超えて、今やわれらが国われらが民族は鞏き覚悟、堅き決意もて大いなる興隆の道へと進まんとしてゐる。この非常の秋、わが社は過去拾余年の好成績に鑑み、さらに又、この重大時期にふさはしき力量ある新人の出現を待望して、ここに第十回懸賞創作を募集を発表する。希はくは、日耳にすする戦場の勇武に比敵する態の力作を奮つて寄せられんことを。武運と共に、文運の隆盛をもたらずことも、亦戦時日本の一つの誇りであるからである。

この応募に応え集まつた原稿は「五百編余」で、投稿数が述べられている中では過去最低であつた。二等当選作は小倉龍男「新兵群像」、竹本賢三「蝦夷松を焚く」と井上薫「大きい大将と小さい大将」で、前二作は入選発表と同時に『改造』に掲載されたが、「大きい大将と小さい大将」は結局掲載されないうままという非常にいいかげんな対応で終わった。

8 おわりに

『改造』懸賞創作は、戦前の〈文壇〉における位置づけを説明する際に、芥川賞と並び称されることが多い。⁽³⁴⁾にもかかわらず、現在、『改造』懸賞創作の存在はほとんど忘れ去られている。

それには、『改造』が一九五五年に廃刊となったことも影響しているであろう。しかし、雑誌と〈懸賞〉が無くなったとしても、〈懸賞〉があり、〈懸賞作家〉がいたことまで忘れられてしまうのは、『芥川賞に比肩する〈懸賞〉』という評価に釣り合わないのではないだろうか。

もちろん、『改造』懸賞創作が存在していた当時の芥川賞は、今日ほど『文壇』における価値を持っていなかったことは確かである。しかし、戦前の芥川賞受賞作家や受賞作の中で、戦後も読み継がれたものの数を考えるとき、『改造』懸賞創作の当選者たちとそのテキストの行方には非常に寂しいものを感じる。

この両者の格差は、やはり『改造』の懸賞創作当選者たちに対する「当選後」の扱いによるのであろう。『改造』にとって、懸賞創作の意義は、そのイベントの華々しさと集める注目にあつて、優れた当選者を確保し、雑誌に貢献させよう、ということにはなかったのだ。

当選者の中では非常に安定した地位を手に入れていたはずの芹沢光治良も、『改造』編集者と当選者たちの会合である「改造友の会」の、次のような飲み会の場面を回想している。

今も思い出すのだが、或る晩、銀座裏で「改造友の会」をして、会員が酔った頃、その晩欠席だった改造編集者の深田（久弥―引用者）記者が、他の会合ですでに酔って、紛れこんだようにして、突然友の会に現れた。素面の私の横にわりこむようにしてから、からみかかった。（略）お

い、編集者にいつだって泣言や苦情を言う会だろう？ 友情をあたためるなんて言って……いい小説さえ書けばいいんだよ。へたな小説をのせて見ろ、雑誌がつぶれるぞ。編集者は当選作には責任を持つが、当選作家の将来には責任を持たんよ。こんな簡単明瞭なことが、君にもわからんか……というような言葉を、酒臭い息で吹きかけて、私は閉口したが、間もなく深田記者がいつしよに会議していたらしい文壇人が二、三人奥から出てきて、深田記者をむりにつれ去ったので助かった。しかし、白々しい空気がのこつた。改造の記者たちには或る当惑をかくせなかったが、当選者たちには憤りや悲しみのやり場がなかったようである……。（傍線は引用者）

芹沢の回想には誤りもあり、深田久弥は三〇年に文筆活動に専念するため既に改造社を辞めている。「改造友の会」の結成は三一年の第四回以降のことになるので、ここで登場する記者が深田であるのはおかしい。

しかし、誤りはあるものの、当選者の中では「成功した」部類の芹沢までも、当時このような印象を持っていたと表明するところに、当選者たちの厳しい状況が伺えるであろう。そして、『改造』側の当選者たちへの対応も推測できるのである。

当選者の多くは、戦中、なし崩し的に戦争協力に加わった。それは〈懸賞作家〉以外の作家たちも同じではあったが、戦後になり、同人誌グループなどの帰る共同体を持っていた作家たちと比べ、『改造』の〈懸賞作家〉たちの多くは行き場を無く

し、戦後は「中央文壇」での文学活動を再開できない者の方がずつと多かった。戦後の『改造』も彼らを考慮せず、テキストを取り上げることもほとんどなかった。

もちろん、彼らの行く末の責任の全てが、『改造』にあるわけではない。むしろ、その過半は、日本帝国が次々に引き起こした戦争にある。『改造』懸賞創作の歴史は、昭和の日本帝国による侵略戦争の歴史とほとんど重なっている。テキストへの影響を鑑みても、『改造』懸賞創作は、戦争に翻弄された「懸賞」であつたのだ。

大切なことは、日本帝国の戦争、『改造』の権威に釣り合ふぬ場当たりの運営・経営、既成「文壇」への強迫観念、獲得した「懸賞作家」という地位によって生まれたそれまでの自分との落差……そういった状況において、『改造』懸賞創作とその当選者たちが何を残した来たのか、それを探しだし、整理し、評価することにある。彼らを「翼賛作家」と言ったり、『実力不相応の作家』であると批判するのは、たやすい。しかし彼らの関わったものは、昭和の近代文学を検討する上で、非常に重要なものではないだろうか。それを単純な批判で片付けてしまわずに、そのような彼らの登場した背景、そのような彼らの生んだテキストへの検証を、これから行っていきたいのである。

注

(1) 杉山欣也「大衆の時代」における文学とメディア―序にかえて『大衆文学の領域』（大衆文化研究会編 二〇〇五）参照。

(2) 高島健一郎「円本——改造社と春陽堂の比較を通して」『日本出版史料』（二〇〇四年五月）を参照。

(3) 紅野謙介「懸賞小説の時代」『投機としての文学』（新曜社 二〇〇三）を参照。

(4) 大東亜／太平洋戦争勃発後は四二年に「第一回戦時新人小説募集」が行われ、戦後には「改造懸賞小説」として、五〇年に「復活第一回」五一年に「第二回」が募集されている。

(5) 「中央公論」「文芸」はいずれも三回までで以後の募集は停止している。「文芸」はこの後に「文芸推薦」と称して各地の同人誌に掲載されたテキストを募集し、そこから織田作之助「夫婦善哉」が登場している。

(6) もっとも、この懸賞創作募集が注目を集めなかったもう一つの要因として、芥川龍之介の自殺の影響も考えられる。「改造」二七年八月号の発売日は七月二十日であったが、その四日後の二十四日に芥川は自殺している。翌月以降の各誌文芸欄は芥川追悼記事で埋め尽くされており、そのほかの文芸記事が入り込む余地はなくなっていた。

(7) 紅野前掲書参照。

(8) 水島治男「改造社の時代 戦前編」（図書出版社 一九七六）。

(9) 芹沢光治良「小説家の不運」「文学者の運命」（主婦の友社 一九七三）。ここでは「芹沢光治良文学館 エッセイ こころの広場」（新潮社 一九九七）所収分を参照した。

(10) 高見順「昭和文学盛衰史」。ここでは、文春文庫版（一九八七）を参照した。

(11) 上林暁「懸賞作家——名、作家の運命」「文学界」一九五六年六月号を参照。これは小説であるが、芹沢は雑誌「急進」でデビューした鴨沢光郎のモデルとして語られている。この中で、上林暁がモデルである「私」が、「まともに活躍しているのは、鴨沢さんだけですなえ。」と述べる箇所がある。

(12) 第一回二等当選者の保高德蔵「怖るべき文壇」「作家と文壇」（講談社 一九六二）に、次のような記述がある。

二人（第一回当選者の竜胆寺雄と保高一引用者）は春の銀座を歩いて、モナミでコーヒを喫み、いろんなことを話した。彼は文壇には誰も知った人がいないことや、それだけに懸賞に当選しなければ、いつ文壇に出られるかわからなかったことや、それまでの苦労話や、彼の語るところはことごとくわたくしの語ろうとするところと同じである。（略）当時（大正末期から昭和初年）のジャーナリズムは、てんで新人を受けつけなかったのである。理由は、藤村、秋声、白鳥、秋江、荷風、小剣等、明治の大家が健在している上に、大正時代に簇出した多くの作家が中堅として旺んに活躍し、文壇は作家で溢れていたこと、雑誌の数が少なかったこと、円本で資金が潤沢になつた出版社が雑誌を手工業的規模から大量生産的にしたので、一步誤ると損失も大きくなることなどで、冒険のともなう新人の紹介をやらなかつたのである。

- (13) 第十回は、投稿作の分量上限が二百枚に引き上げられ、賞金は一等一〇〇〇円、二等五〇〇円に減額されている。

- (14) しかし、実際にこの十編中から『改造』に掲載された作品はなかった。ちなみに、第一回の佳作の一編である「芳蘭」は、金子光晴の投稿作である（『どくろ杯』の中で触れられている）。

- (15) 「懸賞創作入選発表」に付された「入選者略歴」、『改造』三〇年四月号。

- (16) ここで大江の言っている「人道主義の書生」というのは、彼が武者小路実篤のもとで書生をしていたことを示している。大江の自伝『アゴ伝』（新制社 一九五八年）によれば、大江は武者小路とは合わず、しばらくしてその元を離れた。大江の場合、その後主にプロレタリア文学作家と交流ができていて、その意味では『改造』懸賞創作当選以前に「文壇」とのコネクションを持っていたことになる。

- (17) 龍瑛宗「バイヤある街」の当選については、和泉司「懸賞当選作としての「バイヤある街」——『改造』懸賞創作と植民地「文壇」——『日本台湾学会報』第十号（二〇〇八年）を参照。

- (18) 和泉司「憧れの「中央文壇」——一九三〇年代の「台湾文壇」形成と「中央文壇」志向——『文学年報2 ポストコロナルの地平』世織書房 二〇〇五）を参照。

- (19) 前掲『改造』の三十年「改造」五〇年一月号。

- (20) 中根隆行は「朝鮮」表象の文化誌（『新羅誌』二〇〇四）の中で、『改造』編集者・佐藤績の発言を引き、「懸賞創作の応募者に要請されたのが「題材の特異性と技術の秀拔」であり、特に強調されたのが「題材の特異性」であったと指摘している。それが朝鮮での「改造」懸賞創作を初めとする「懸賞」熱を加速させた要因の一つとみている。また和泉司「田郷虎雄「印度」とその後——「懸賞作家」と「戦争」と「文壇」と——」『三田國文』第四十六号（二〇〇七年十二月）でも、中根の論を受けて、同様の指摘を行っている。

- (21) 三田英彬「作家案内——竜胆寺雄」「放浪時代 アパートの女たちと僕と」『講談社文芸文庫 一九九六』。

- (22) 保高德蔵「怖るべき文壇」「作家と文壇」（『講談社 一九六二』）を参照。

- (23) 「改造友の会の頃」（『芹沢前掲書 一九七三』）。

- (24) 「改造」三二年四月号に、「改造」懸賞当選作家記念懇親会」という記事があり、時期的に「改造友の会」結成と符合する。

- (25) 田郷虎雄については、和泉前掲「田郷虎雄「印度」とその後」において検討を行った。

- (26) 南富鎮「近代日本と朝鮮人像の形成」（勉誠出版 二〇〇二）を参照。

- (27) 第七回は、選外佳作もテキスト題名だけでなく作者名も付されていた。

- (28) 原卓史「芥川賞の反響——石川達三「蒼氓」の周辺——」（『近代文学合同研究会論集第1号 新人賞・可視化される「作家権」』）『近代文学合同研究会 二〇〇四』を参照。

- (29) 原卓史前掲論文を参照。
- (30) 任展慧「植民者二世の文学——湯浅克衛への疑問」（『季刊三千里』

- 五号 一九七六）および池田浩士「解説・湯浅克衛の朝鮮と日本」『カンナニ 湯浅克衛植民地小説集』（インパクト出版界 一九九五）では、解釈に違いはあるものの、どちらも「焰の記録」を転向小説と解釈している。
- (31) 同時代評については王恵珍「龍瑛宗「パイヤのある街」に与えられた日本文壇の批評」『野草』第七一号 二〇〇三）を参照。
- (32) 龍瑛宗は台湾の文芸同人誌『台湾新文学』（三十七年七月号）に「若き台湾文学のために」という随筆を寄稿し、その中で〈台湾文壇〉の既存の台湾人作家たちを褒め称え、自分は文学の外の人間である、と弁明している。
- (33) 龍瑛宗の戦前の経緯については、和泉前掲「懸賞当選作としての「パイヤのある街」を参照。
- (34) 水島前掲書、川端要寿「昭和文学の胎動」（福武書店 一九九一）、高見前掲『昭和文学盛衰史』、上林前掲「懸賞作家」「あとがき」『油麻藤の花』（酒井龍輔 龍虎の会編 さろん・ど・漱雲 一九九九）などにそのような記述が見られる。
- (35) 「改造友の会のごころ」（芹沢前掲書 一九九七）を参照。